

---

# トールルの鐘

クォーツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トールルの鐘

### 【Nコード】

N4427Y

### 【作者名】

クオーツ

### 【あらすじ】

あの日、俺は全てを失った。

そして、誓ったんだ。俺が何もかも変えてやるって。

----- 大切なものを奪われた青年は、復讐の道で何を思うのか。

これは、孤独な戦いに身を投じた、ある一人の男の物語



## プロローグ（前書き）

この作品は、あまり頻繁に更新出来ないと思いますが、よろしくおねがいします。

## プロローグ

目の前に広がっている光景は、まるで地獄だった。辺りはどこも血に塗れていて、鼻がむせ返るような濃い臭いが漂ってくる。

その臭いの出どころは今なお増え続けている。

おそらく、どこかの騎士団が正式採用している物なのだろう。随分としっかりしていて、強度の高そうな鎧を着た、兵士と思しき人間が、集落のみんなを追いかけ回して殺戮している。

逃げ惑う人々。捕まってしまい、大きな氷柱のような物で串刺しにされている人や、全身が焼け焦げて生き絶えている人、さらには巨大な岩に押し潰されている人も見える。

中には敵と応戦している者もいる。そして、相手を確実に討ち取ってもいるのだ。

だが、明らかに人数が違いすぎる。これでは、いくら頑張ったところで全滅は目に見えている。

しばらく、集落の入り口の辺りから、その光景を呆然と見ていた俺だったが、どこかに隠れたりしなかったのは流石にまずかった。

どうやら、敵の一人に見つかってしまったようだ。その大きな鎧を着た兵士が、何事かを叫びながらこちらに向かってくる。

「おいつ、まだあそこに生き残ってる奴がいるぞ！」

「なんだ、まだ子どもじゃないか。あんなもん余裕だろ。俺が行ってくる」

しかし、そんなことは俺の目に映ってもいなかった。

今、俺の視線の先にある幾つかの物。いや、あれは“者”だ。ぱっと見は赤黒い肉塊だがそれにはどうやら手足や顔らしいものが付いている。それはたしかに人間だった。

そして、あの肉塊達についているお揃いのブレスレッド。あれは、先月妹の誕生日にと俺が作った物だ。どうせなら家族みんなの分をと思い、自分の物も入れて四つ作った。

それが、三つある。あの肉塊に三つについているのだ。

そのの意味するところが分からない程、俺は愚かではなかった。いや、いつそのこと分からなければ良かったのかもしれない。

俺は何も考えずに肉塊に走り寄った。どうやら後ろから先程の敵が迫ってきているようだが、そんなことはどうでもいい。

ただ、鎧の出すガシャガシャという音が耳障りなだけだ。

俺はそれを無視して肉塊の側に膝をついた。

肉塊に呼び掛けてみる。だが返答は無い。今度は少し強めに揺さぶってみる。だが、それでもやはり反応が無い。

もう何がなんだか分からない。つい数時間前までは、ごく普通の幸せな集落だったのに……。

ふと何者かの気配を感じて振り返ると、後ろに俺を追いかけて来ていた兵士が立っていた。

俺に向かって何か怒鳴っている様だが、何も耳に入っていない。

むしろ俺の耳からは、音という物が凄まじい速さで消えていく。

もう何も聞こえない。

ただ、一つだけ分かったことがある。

今、俺は怒っているのだ。脳が沸騰しているのではないかと思うくらい、怒っている。

こいつらは、俺の日常を奪っている。もう元には戻れないだろう。こいつらのせいで全てが変わってしまった。こいつらのせいで……。

もう、我慢できない。俺に向かって剣を振り下ろそうとしている兵士に向かって、俺は手を向ける。

そして、叫んだ。

「報復の………劫火………！」

その瞬間、俺の手からまるで明けることのない夜の空を思わせるような漆黒の焰が広がった。それは凄まじい熱と轟音を発しながら、敵に向かっていく。

そして、その焰は俺の手の先にいた、剣を振りかぶったままの兵士を呑み込み、そのまま後ろの地面にぶつかる。

まるで何かが爆発したかのような大きな音が、辺りを満たした。焰が着弾した辺りの地面は黒く焼け焦げ、大きく抉<sup>えぐ</sup>れている。

あの兵士は全身を焰に焼かれて死んでしまっただろうか。きっと死んだに違いない。

だが、別に罪悪感を感じたりはしない。あいつらは殺されても文句の言えないようなことをした。むしろ、本当にいい気味だ。

そう思った瞬間、俺の体が傾いて、地面に倒れこむ。だんだん意識が薄らいでくる。今、俺が使える限界の魔術を使ったのだから、魔力が切れてしまったのだ。

消えていく視界の中で、何人かの兵士がこちらに向かってくるのが見える。さっきの魔術が起こした音を聞いたのだろう。

このままでは俺は確実に殺されるだろう。それで、構わない。もう自分には何も残っていないのだから。

「父さん、母さん、アリス……。俺ももうすぐそっちに行くよ……」

そう呟いた瞬間、俺の意識は闇に落ちて行った。

## 第一話 一触即発（前書き）

主人公が使う魔術を変えました。他の方の小説とかぶってたので。そういうことで、今後ともよろしくお願いしますm( )m

## 第一話 一触即発

今俺が立っている場所は、この大陸のほぼ南半分を治めるエインガルズ王国の王都であり、最も巨大な都市、アーステイル。その中心部にある、かなり立派な王城の城門前だ。

そこで俺は、俺の師匠と別れの挨拶をしていた。

「それでは、見送りはここまでです。ここから先は、ラトス一人で行ってください。必ず目的を達成して下さいね」

「はい、師匠。

どんなことがあっても、絶対に達成してみせます。

……こんな国、俺が壊してやります」

俺がそう言うと、師匠はため息を吐いた。たしかに、こんなに人がいる所で言うことじゃあ無かったかもしれない。

そんなことを思っていると、師匠が俺を見てまたため息を吐いた。どうやら師匠が言いたかったことは、そういうことじゃあ無いらしい。

「ラトス、たしかにこの国は腐っています。もう、どうしようも無い程にね。

でも、これだけは忘れないで下さい。この国にはたくさんの罪無き

国民がいることを。

あまり派手なことをしぎると、多くの人に影響が出ますよ。  
これからは、賢明に動いて下さいね」

「分かってますよ。俺は無関係の人を傷付けたりは絶対にしません。  
そんなんじゃないあ、あいつらと何も変わらないから……」

「分かっているのならいいんですけど」

また嫌なことを思い出してしまった。あの、血に塗れた一日のこ  
とを。

俺はあいつらを絶対に許さない。必ず引きずり出して、然る<sup>しか</sup>べき  
罰を受けてもらう。

「そんなことより、今大事なのは試験ですよ。これに落ちたら全て  
台無しですからね。頑張ってくださいよ。」

まあ、ラトスの実力ならそう難しいことでは無いと思いますけど」

黙り込んでしまった俺をじっと見ていた師匠は、口を開くと俺に  
応援の言葉をくれた。

そつだ、この試験に失敗することは絶対に許されない。気を引き  
締めて臨まなければ。

「はい、頑張ります。」

そして、この国は俺が絶対に変えてみせます。師匠は安心して見て  
いて下さい」

「ええ、私もその瞬間を待ち望んでいますよ。」

ああ、それとあなたに言っておかなければならないことがあります」

師匠は、大事なことを忘れていた、とでも言いたそうな表情で一つ付け足してきた。

「あの焰は、出来るだけ使わないようにして下さいよ。

知っている人がいたなら、あなたの素性がばれることもあり得ますから」

たしかにそれはあり得ないことではないし、もしそうならばかなりまずい。正直、あれが使えないのは結構痛いけど仕方ない、か。

「分かりました。気を付けておきます。

それじゃあ、そろそろ時間なので、行ってきます」

俺のその言葉でもう時間が差し迫っていることに気付いたらしい師匠は、急に焦り出しながら俺に向かって言った。

「本当です！ もう試験開始の時間まで一時間もありませんよ！早く行かなくては失格にされてしまうのでは？ さあラトス、もう行かないと」

師匠のその焦りように、俺は思わず笑ってしまった。

だって、あの普段は常に冷静沈着な師匠が焦ってるのなんて、滅多に見られるものじゃあ無い。

俺がクスクス笑っているのに気付いた師匠は、一瞬苦り切った表情を浮かべた後、もう一度俺を急かした。

「ほら、本当に遅れてしまいますよ。こんなしょうもないことで失格にされてしまったら、許しませんからね」

たしかにもう結構ぎりぎりの時間だ。そろそろ行くとしよう。

「大丈夫ですよ、師匠。

それじゃあ、もう行きますね」

「はい、ラトスならきつとどうにか出来るでしょうし、あまり心配はせずに待っていますよ。

じゃあ私ももう、うちに帰りますね。

ラトスは全て終わらせるまで帰ってきてはいけませんよ」

師匠はそう言つと、俺の背中を押して、城門の中に思い切り突き飛ばしてきた。

「いつっ……」

文句を言おうと、後ろを振り返った俺の口から出たのは、文句では無く、ため息だった。俺の視界の中から、師匠はもう消えていたのだ。

やっぱり、いつ見ても師匠の身のこなしは半端ではない。

あんなに強い師匠が田舎で農家の真似をしてるなんて、究極の宝の持ち腐れだと思うのは俺だけなんだろうか。

まあ、そんな師匠が作る野菜が予想外にうまいのは、ごく愛嬌といったところか。

「おっと、しょうもないことを考えてたうちに、時間が本格的にやばくなってる」

腕時計を見てみると、試験の時間まで後三十分もない。試験会場まで走って行かなくては。

「ふう、とうとうこの場所まで来たんだ。絶対にみんなの仇は取ってやる……」

俺は少し後ろ暗い決意と共に、王城の敷地内にある会場に向かって走り出した。

会場に到着した俺の目に飛び込んできたのは、大きな闘技場のような建物だった。

入り口の横に立て掛けられた板には“第一訓練場”と書かれている。

おそらく、兵士達が訓練をする時に、使用する場所なのだろう。その規模は、数百人の兵士が入っても大丈夫そうなくらい、大きい。

入り口からは、何人かの屈強そうな男達が入って行く。試験の受付は中であるのだろう。

いつまでも外で突っ立っていたって仕方ないし、俺も中に入ろう。何故か周りの男達にじろじろ見られているような気がするし。

「うわ……中も凄いな。これ、どれだけお金かかってるんだろう」  
入り口から中に入ってるみると、ロビーのような空間が広がっている。だが、凄いのはその内装だ。

流石王城、とでも言えばいいのだろうか。床は恐らく大理石だし、天井からはシャンデリアが吊り下げられている。

「ここ、兵士の訓練場だよな？　こんな豪華にする必要あるのかな……？」

「おい、なにぼーっと突っ立ってんだよ。邪魔だろうが」

俺が呆れていると、後ろから誰かに声を掛けられた。だがそれは、とてもじゃないが友好的とは言いがたいものだった。

もう少し言い方ってものがあるだろう。

少し頭にきたがここで無駄な争いを起こしてしまったら、後々面倒だ。俺は振り返って無難な返事をした。

「ああ、すみません。直ぐにごとくよ」

後ろに立っていたのは、長年使い込んだのだろう、すっかり体に馴染んでいる革鎧を着て、腰には大振りの大剣を下げている、いかにも、といった感じの男だ。

そいつは振り返った俺の顔をじろじろ見ていたかと思うと、急に笑い出した。

一体なんなんだ？

「おいおい、なんだよその面は。ここはお前みたいな優男がくる所じゃないぜ。」

さっさと帰らないと痛い目みるぞ？」

男が大きな声でそう言った途端、周りにいた他の男達の何人かからも笑い声が漏れた。

全く、どこにでもしょうもない奴はいるもんだな。

俺がそんなことを考えていた時だ。男達の下卑た笑いに、鈴のような綺麗な声が混じってきた。

これは……女の子だよな？

「ちよつと、あ、あなた達一体なんなの？　そういう失礼なことを言うなら他でやってよ。みんな真剣にここに来てるんだから」

その言葉の主は、やっぱり女の子だった。俺より少し年下かな？　恐らく十六、七歳だろう。可愛らしい顔をしているし、体も随分と華奢だ。そして、亜麻色の長い髪を後ろで一つに纏めている。

正直こんな所には似つかわしくない子だな。

彼女は何故かは分からないが、どうやら俺を擁護してくれているようだ。このまま、見ているだけでいいものだろうか……。

俺が彼女を長々と観察していた間、あの男も同じことをしていた

らしい。

しばらく口を開かないと思ったら、先程よりも大きな笑い声を上げて彼女に向かって口を開いた。

「なんだなんだ、優男の次はガキか。お前ら試験を舐めてるのか？  
ここは、俺のような選ばれた者が来る場所なんだよ。  
遊び気分なら帰れ」

男がそう言った後、手の骨を鳴らして女の子を威嚇している。

あの女の子も元々、別に気が強いという訳ではなかったらしく、  
怯えてしまっている。

全く、怯えるくらいならそもそも何であんな啖呵を切ったりする  
んだか。ここで俺が出て行かなくちゃ、まるで臆病者だな……。

あんまり目立つなって言われてたけど、この場合は仕方ないよな。

「おい、あんた女の子に向かってそんなことして、恥ずかしくない  
のか？ 最初は俺に突っかかってた癖に、そっちに逃げる訳？」

ああ……俺、こんなこと言うキャラじゃないんだけどな。

「何だと、おい。もう一回言ってみろっ！」

俺がちよつと挑発した途端、男が切れた。拳を振りかぶってこちら  
らに向かって来る。

周りにいる奴らが、流石にやばいんじゃないのか、などと呟いて

いるのが聞こえる。そう思うなら止めればいいんじゃないかと思うのだが、そんな度胸のある奴はいないらしい。

ふと気付くと、男の拳が目の前に迫ってきていた。近くである女の子が息を呑む音が聞こえる。

まあ、別に避けるのは簡単そうだけど、後から「こちゃこちゃ言われると面倒だから、ちょっと眠っててもらおう。」

もうあと数センチで俺の顔に拳が当たる、という距離まで男が近づいて来た時、俺は男に人差し指を向け、周りに聞こえるかどうかという大きさの声で呟いた。

「燠火<sup>わきび</sup>」

「うっ！」

その瞬間、人には認識出来ないであろう短さで、一瞬の爆発が起こった。相手のごく近くで、ほんの少しの間だけ発動させた魔術。

まあ、誰かに気付かれたということも無かつただろう。少し、やり過ぎたような気もするけど、天罰だと思って成仏してくれ。

男は、剣が床にぶつかるやかましい音を立てて、崩れ落ちる。頭のすぐそばで爆発が起きたために、空気の激しい振動で軽い脳震盪になったのだ。

俺は、その場に倒れ込んで時々痙攣している気味の悪い男を放ったらかし、そのまま受付に向かうことにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4427y/>

---

トールルの鐘

2011年11月18日04時56分発行